



YA担当者より

ありがとう 20周年  
佐賀市立図書館 開館

# 冬のオススメ本紹介

『13歳は二度あるか  
「現在を生きる自分」を考える』  
吉本 隆明／著 大和書房 914ヨ

表紙を見ても、かわいいキャラクターはいない、ワクワクするタイトルでもない。吉本隆明って誰？はっきり言って、固そうで面白くなさそう、と、思われそうな本。

説教や、だらだらした人の話は聞きたくない… そんな13歳に『じゃあ自分で考えて生きていけるように』と『世の中の読み方』を教えてくれる1冊です。

読んで納得したという感想も、意味分かんない、納得できないという感想も可。それこそ自分で考え始められたということ。これから大いに世の中を読んでいってほしいと思います。



『おくりものはナンニモナイ』

パトリック・マクドネル／作 谷川 俊太郎／訳  
あすなろ書房 Eマ(チャ)

いつもと違うある日。ネコのムーチはだいすきな友達のアールに贈り物をしようと思いつきます。でもアールは、ごはんのお皿も、ベッドも、ガムも、なんでも持っているのです。

なんでも持っているアールが喜ぶもの…ムーチが思いついたのは、「ナンニモナイ」をプレゼントする事でした。でも、「ナンニモナイ」なんて一体どんなもので、どこにあるのでしょうか？

かわいいイラストと詩で、ものよりも大切な気持ちを感じさせてくれる1冊です。



『車夫』

いとう みく／作 小峰書店 913イ

吉瀬走、17歳。高校2年の2学期、事業に失敗した父が失踪し、両親は離婚。母も行方をくらました。住む家を失い、学費も払えなくなった走は、部活のOB・前平俊平の誘いで、車夫(人力車のひき手)として生きていくことを決意する。

主人公の走はもちろんのこと、力車屋の仲間たち、お客たちにも辛い過去があり、それぞれに感情移入してしまうこと請け合いです。

※ 2016年11月下旬  
続刊刊行予定



『プラネット・オルゴール』

小沢 章友／作 講談社 913オ

12歳の夏休みを、清里高原に住む父親の友人のペンションで過ごしたとおる。同い年のゆりかと過ごしたその夏は、とおるにとって特別な夏となった。25歳になったとおるは、ある手紙をきっかけに、ゆりかとの約束を果たすため、冬の清里へ行くことに・・・。

佐賀県出身の作家が描いた、星のまたたきと、オルゴールの音色が聞こえてくるような、きらきらとしてせつない物語です。



資料はすべてYAコーナーにあります。